

佃 弘子・大沢 済
第42回日本動物学会大会 (1971)

2) メダカの発生過程における環境温度の生理的影響

大沢 済・佃 弘子
第9回日本生物環境調節学会大会 (1971)

3) Relations between prolonged hypothyroidism and electroneuro-physiological events in trout, *Salmo gairdnerii*. Effects of replacement doses of thyroxine.

K. Oshima C. Johnson and A. Gorbman
第6回国際比較内分泌学会議 (カナダ, 1971)

総 説

1) サケの回遊と嗅覚

大 島 清
〔「味覚と嗅覚」(1971) 朝倉書店, 東京〕

幸島野外観察施設

施設長 河 合 雅 雄 (兼)。

幸島野外観察施設は設置以来4年目を迎え、ようやく軌道にのった感がある。施設を利用した研究者は延497人におよび、その他学生や一般人の来訪も多い。

研究活動が高まっている反面、研究遂行を阻害する事件が頻りに起こり、その対策にあげられた。幸島は串間市の所有する所で、島は「ニホンザル生息地」として天然記念物に指定されている。都井岬に通ずる海岸道路が完成して以来観光客が急増し、幸島は観光開発の波にのまれてしまった。その上、夏になると幸島と本土の間の海域に砂が堆積し、干潮時には陸続きになる現象が起こった。このため観光客は自由に渡島でき、またサルが本土に渡るという事態が起こり、研究遂行上大きな障害が生じた。このような状況の中で起こった主な事件とそれに対する措置は次のようである。

1. 幸島およびその周辺の観光価値が高くなるにおよんで、一部の地元民と業者が幸島対岸を海水浴場にしようとし、その申請を県に提出した。これが実現すると海水浴客が幸島へ多数渡り、研究は事実上ストップするのは明らかなので、この阻止のために関係当局と接衝を重ね、一応阻止に成功した。この件で施設長名で串間市長 (昭和46年7月5日)、熊本営林局長、串間営林署長 (昭和46年6月2日) に公文書を出した。

2. 昭和46年2月に突如幸島を観光業者に売却するという話が市議会で持ち上り、その処置を市議会観光開発特別委員会に附託された。この計画が実現すれば、当研究施設は事実上閉鎖の状況に追い込まれることになる。この計画を阻止するために、県、市その他関係官庁、関係者に強く働きかけ、一応中止させたが、根は深く残っており今後も再発の恐れは十分にある。この件につい

て谷口串間市長に所長名六文書 (昭和47年3月2日付) を手渡した。

以上のように、当研究施設の存立をおびやかすような事態が続出しており、根本的な対策をたてる必要に迫られている。幸島は公有地であり天然記念物の指定を受け、また国定公園の第2種地域なので、まさか観光業者への売却といった最悪の事態が起こるとは予想もしていなかったことである。ここに至れば、根本的な解決策としては、学術の場としての幸島の確保について市当局と恒久的な契約を結ぶか、国有地化するより方法はないであろう。

サルの状況

昭和46年3月31日現在133頭 (ただし、不明個体22頭を含む。不明個体の大部分は、砂州を伝って本土へ渡ったものと推定される)。

昭和46年出産: 16頭 (オス12, メス4)。

死亡: アオメ (♀, 20歳), ナツ (♀, 22歳), 新生児2頭, リーダー: セムシ (20歳), ノミ (18歳)。

研究概要

1) 生態学的研究

河合雅雄, 三戸梅代, 三戸サツエ

前年度からの継続で、出生、成長、死亡、出産期、性交期、等ボピュレーションの動態に関する研究を行なった。また、体重の測定、食物リストの作製も行なっている。

2) 社会学的研究

河合雅雄, 三戸梅代, 三戸サツエ

社会変動について、1952年以後の継続研究を行なっている。今年はとくにリーダーの交代による影響を調べ、ヒトリザルの群れへの復帰、リーダーステータスの確立、メスとの関係に興味ある知見がえられた。また、1953年以後の継続研究であるカルチュア現象についても研究を行なった。

3) その他幸島のサルを対象に研究を行なった研究者は江原昭善, 三戸梅代がいる (部門の項参照)。

4) 共同利用研究員による研究

研究者は森明雄 (76日), 邨守敦夫 (15日), 香原志勢 (9日), (共同利用の項参照)

5) その他

本施設を利用した長期の研究としては、

1. ニホンザルの群れの生物経済学的研究

岩 本 俊 孝 (九大・理・生物)。

一定時間に日に数度ムギを与え、個体ごとの摂食量を測定し、摂食量と順位の関係を解析した。また自然食の摂食量と排泄量をおさえて同化量を算出した。消化率を一応70%とおくと、一日の基礎代謝量は体重5kgのサルで約500kcal, 10kgのサルで700~800kcal である。

この値は、昭和44年幸島で行なったテレメトリによる結果とはほぼ一致する。

なお採食する食物の種類とくに昆虫食について調べ、一日の採食リズムについてもいい成果を得た。(延調査日数71日、研究補助員3名延24日)

2. 幸島の群れの遊牧生活。

木村光伸(京大・農・林学)。

幸島の植生を把握し、植生の季節変化、食物の変化と関連して群れの遊牧生活を明らかにしようとした。また餌を投与した場合の遊牧生活のあり方を観察した。遊牧のコース、リズムは季節によって異なるが、概して食物に関係していると考えてよい。例えば5月や11月は食物量が多く、散在しているのでサルは何処でも採食できるから食物は遊牧コースの決定要因にならないが、夏や冬は食物による影響が大きい。餌の投与の影響は中心部に大きく作用し、連続給餌の投与は遊牧生活を大きく変化させられると思われる。

サル類保健飼育管理施設

久保田競(兼)

登倉尋実

松林清明

昨年度の年報では昭和43年度より昭和45年度の間のサル施設の紹介をおこなった。今回は昭和46年度の動きを紹介する。

第1表は昭和46年度のサルの移動報告を示す。この表で注目されることは、結核で殺処分したアカゲザルが21頭の多数にのぼったことである。これらのサルの大部分は検疫期間中の検査では陰性で、検疫終了1カ月後たまたま斃死したサルの剖検により典型的な粟粒結核が岐阜大学の井上博士により発見され、残りのサルにツベルクリン反応を試みたところ、多数のサルが陽性であることが判明した。陽性ザルのなかには神経生理部門で実験中のサルも含まれていた。地下ケージ室のサルの移動禁止の措置がしかれ、全頭のサルのツベルクリン反応検査がおこなわれた。アカゲザルから他の種類のサルへの感染はなかったが、所内研究・共同利用研究の進捗に少なからぬ影響を与えた。その後殺処分したサルの臓器から結

第1表 昭和46年度サル移動報告

種 名	入 荷		死		亡		実験殺出 産	
	購 入	寄 附	検 疫 中 弱 赤	痢 結 核	事 故 死	そ の 他		
スローロリス		3	2					
ヨザル	6	1				1	3	
リスザル	5					2		
タイワンザル	1				1		4	2
アカゲザル	27	16	1	4	21	2	2	24
ニホンザル	17					3	4	8
ベニガオザル	11		2				1	1
カニクイザル	14	3						2
ブタオザル								1
M. f. f. × M. m								1
ミドリザル							1	
パタスザル		1						
フサオマキザル	1							
シロテナガザル							1	
小 計	82	24	5	4	21	6	12	
合 計		106			48			42
								8